

学生から見た ODA、円借款、OECF

もっと知って欲しい ODA、円借款、OECF

学生による
座談会

課題は ODA と NGO の連携強化、環境にも力を

座談会参加者

川田 慎也氏 (かわだ しんや)	慶應義塾大学 総合政策学部 2年
後藤 智子氏 (ごとう ともこ)	獨協大学 法学部 3年
松岡 昇氏 (まつおか のぼる)	早稲田大学 政治経済学部 3年
ジョイス ファン氏 (Joyce Huang)	横浜国立大学 経済学部 1年
藤原 新一氏 (ふじわら しんいち)	早稲田大学 政治経済学部 4年 (順不同)
(司会) 石灘 哲子 (いしなだ のりこ)	OECF 広報課員

現在と未来を結ぶのは若者たちだ。アジアの途上国に、中南米の貧しい国に、アフリカの大地に、若者ではかけ世界を見聞して帰ってくる。その若者達の国際協力を見る目は熱い。若者達は途上国の ODA プロジェクト現場を訪ねたり、NGO の活動に参加するなど、国際協力を積極的に参加し力を発揮し始めている。OECF ニュースレター新年号では国際協力に関心の深い学生達に集まってもらい、ODA のこと、OECF のこと、そして国際協力のことを語り合ってもらった。

勉強し続けること—国際協力の第一歩

石灘：最初に皆さんの勉強の動機、目的を教えてください。



藤原：国際協力に興味を持ったのは、テレビなどで“飢えたアフリカの子”を見て、日本で不自由なく過ごしてきた自分との違いを強烈に感じたからです。世界を知りたい、なにか自分が役立てる進路があるはずと思い勉強していますが、お金で協力をするというのはすごくわかりやすいところがある。その経済協力の“本質”とは何かを追求しています。

また、OECF のインドでの川の改修事業を見ました。川がひどく汚染されていてインド政府からの要請で改修事業をしていたのですが、このような環境面も今後は重視して欲しい。

石灘：勉強をしていて答えは見つかりましたか。

藤原：格好をつけた言い方ですが、もっと勉強することが大切ではないでしょうか。考えることが大切だし、世界のためになることだと思います。



川田：外交政策を勉強しているのですが、ODA は外交面でも大きな実績をあげていると言えます。ODA を通じて国と国との関係を作っていくためには今の国際環境の中でどのような ODA を実施していくべきか、ということも勉強しています。その中でも、途上国に合った ODA 政策、環境と両立したものが大切です。それを良い外交政策にどのように結びつけていけば良いのかということも勉強しています。

石灘：答えは見つかりそうですか。

川田：藤原さんと同じで勉強を続けることが大切だと思います。過去の失敗例の批判はいくらでもできるでしょうが、ただ批判するだけでなく検証し、その反省を今後の学問の中で積み重ねていくことが重要でしょう。



石灘：OECF も川田さんのおっしゃる様に事業に対し同じ姿勢をとっています。つまり事業が完成した後、その事業がうまく行っているかどうかの評価を行い、教訓を引き出しています。そして学んだ教訓を次の事業にフィードバックしています。それが事業の質を少しずつ向上させることにつながっています。



松岡：私は開発経済学を勉強しています。もともと環境問題に興味があったのですが、環境は常に“開発”と関係しています。その開発に ODA が供与されているということを知ったのが勉強を始めた一つのきっかけです。もう一点は、NGO の活動に参加した時に援助関係者と話をしたのですが、その人たちがすごく輝いて見えた。大学でのクラブ活動では見られないものでした。NGO 活動をしている人や、援助に関わっている人を

もっと知りたいと思ったことが理由でした。

後藤：私の場合、ODA の勉強というよりもなぜ外に目が向いたかを考えると、大分の実家の目の前に大きな工場があり工場のばいじんがひどかった。けれども、その工場が進出してきたことによる経済効果がすごく大きかった。町の繁栄を目のあたりにして開発とはこういうことなんだと感じました。日本は ODA で経済援助を途上国に行っていますが、途上国は公害問題で悩んでいる人たちはいるのだろうか、という疑問を抱いたことがきっかけで ODA や開発経済を勉強しています。

石灘：後藤さんは途上国に行かれたということですが、実際に目に見た感想を聞かせて下さい。

後藤：開発が都市と地方の格差を広げるなど、開発によって避けて通れない問題があるのだということがよくわかりました。環境問題や所得格差の問題は、援助を続けて行く中でやむを得ず生じてくる問題で、(経済の)次に取り組みべき課題だと感じました。

石灘：ジョイスさんが経済の勉強を始めた動機は何ですか。



ジョイス：もともとは貿易を勉強したかったからです。貿易と経営のことで将来は本を書きたいと思っています。



日本の援助、ODA について熱い議論が飛び交う。

ODA、OECF の印象

石灘：次に ODA、円借款、OECF について皆さんが持っている印象を聞かせて下さい。

松岡：ODA というとき JICA という言葉を思い浮かべます。OECF の名前は全然知らないという人が多いですね。

藤原：僕たちのように援助に関心を持っているのならともかく、そうでない人たちは ODA すら“オダ”と呼ぶくらいで、おそらく 8 割以上の人は知らないと思います。

川田：僕自身も ODA という JICA が実施しているというイメージが強かった。JICA はポスターや講演会などを通して青年海外協力隊員を公募していますから名前が知られている。しかし OECF にはそのような手段がない。OECF が円借款を実施する重要な機関というのは知っていたが、ODA を実際に運営しているのは JICA ではないか、というのがイメージでした。



後藤：私の場合、外務省の下に OECF、JICA があるというイメージでした。外務省がなにかを決めてそれを OECF、JICA に下ろして円借款、技術協力をおこなうという 2 段階だと思っていた。

松岡：良いイメージではありませんが、ODA、円借款に関する一般的なイメージとして三つあると思います。一点目はインフラ整備による環境破壊というイメージ。二点目が大規模な事業により利益を上げる商業的な援助というイメージ。三点目が住民のニーズを無視した援助というものです。僕も当初はそういうイメージを持っていましたが、ネパールで JICA や OECF のプロジェクトを見せてもらい、実際に現場に関わっていると実感しました。そこで今日参加されている皆さんに、今の三点のイメージについて伺いたい。

学生から見た ODA、円借款、OECF

川田: 日本に帰ってきて松岡さんが今挙げられた点をもう一度振り返ってみると、まず第一点目の ODA と環境破壊ということに関して言えば、経済開発をすれば当然環境破壊は起こります。ただ、100%は無理としてもできる限り環境と開発を両立させる。これは現在の ODA 政策の中に現れてきています。第二点目の商業的援助という点については、かつて商業主義が ODA と結びついたことはあると思います。しかし、それが結果として民間企業の投資を呼び産業を活性化させた。そうでなければせっかく ODA を供与したのに生かされない。ですから短期的に商業主義がはびこっても、長期的にはそれが国の経済の発展につながるっていくと言えるのではないのでしょうか。第三点目の住民のニーズを無視した援助という点について言うと、僕の見たと（ジンバブエの）灌漑施設は、逆にまさに住民のニーズが実現したものでした。アフリカでは農業のための水資源の確保は重要な問題です。これが住民からの要求として出てきた。これを受けた政府が日本に要請を出し灌漑設備を完成させた。日本から遠く離れた、日本の人がほとんど知らないであろう国にも ODA は住民のニーズを踏まえた上で実施されていると言えます。

後藤: OECF を考えた時、どうしてもハード面での援助が中心だという印象があります。しかし道路や建物やダムを作った後の運営を考えれば、援助の効果を引き出すための人材の育成などソフト面の充実が大切だと思います。

石灘: OECF でもソフト面での援助は増えています。現在人材育成などは力が入れられ案件数も増えています。

後藤: 私たちもゼミの ODA 研究の研修旅行で、ベトナムとタイに行ったのですが、行く前は「ODA の裏側を見てみたい」とか、「住民に波及効果はあるのか」とか、「OECF、JICA の職員と現地雇用されている人たちとの関係はあまりよくないのではないのか」など、非常に斜に構えて考えていた人が多かった。ところが、実際に現場を見てみると、そうではないと皆が考えを改める

ようになりました。OECF の職員、専門家の方など、現地雇用の人たちとの関係も良好でした。しかし、松岡さんが挙げてくれた三点は、学生なら誰でも持っている一般的なイメージだと思います。

藤原: それはマスコミが ODA 批判を繰り返したからだと思います。開発経済学を勉強したり、実際に（現場に）見に行くという人は少数派で大多数の人はマスコミの情報、あるいは（ODA に批判的な）本などから受けた情報による先入観を持っている。

川田: 援助を受ける側の国では政治的な基盤が整備されていないため、住民は政治的アプローチがかけられない。そのため政府官僚などの腐敗の土壌が作られやすく、その国を援助している ODA が批判される。ですから日本がいくら努力しても途上国の政府がそのような状態だと住民のニーズが反映されないと思います。

NGO との連携

石灘: 皆さん実際に途上国に行かれて ODA プロジェクトや NGO の活動をご覧になったとのことですが、その話を聞かせてください。

藤原: インドに行ったときに NGO の活動を目のあたりにしたのですが、すごく地味な活動をしているというのが印象に残っています。NGO は植林や水道の整備などの、地域に密着した細かいニーズを汲み取るには適していると思います。逆に ODA は大規模なプロジェクトを行うのに適しています。ODA、NGO それぞれの長所を生かし合いながら、連携を強めることでさらに良い援助が期待できるのではないのでしょうか。ODA は（規模が）大きすぎて地元の人々の喜ぶ顔が見えてこない。

松岡: はじめから ODA に全部を求めるとするのは無理な話で、ODA は国と国との（契約による）ものですから、ほんとうに被援助国の人たち皆が幸せになるのかどうかは疑問です。そこで出てくるのが NGO の活動ということになります。しかし NGO もす

べてはできません。そこで国全体を支援する ODA と、市民レベルを支援する NGO との交流が望まれます。ODA 予算も NGO への配分が少しずつ増えているようです。これが大きくなればまた違った発展が期待できると思います。

ネパールで JICA の事業を見ました。それは JICA の中でも特殊な事業でした。専門家が住民の中で一緒に生活し、住民自身にいろいろな生活改善のアイデアを考えさせるという事業でした。この事業はすでに 4 年目でしたが、JICA の話だと 5 年継続してうまく行かなければ事業から撤退するとのことでした。つまり、あと一年でうまく行かなければやめてしまう。このあたりが ODA の限界かなと思います。これが NGO でしたらちょっと言い方が悪いですが、自己満足の世界ですから自分が満足するまで延々と続けられる。

石灘: 最近、ODA と NGO の連携は活発になってきています。たとえば OECF のプロジェクトでも日本あるいは海外の NGO との連携というケースが出てきています。

ところで「ODA の量から質への転換」や「顔の見える援助」という言葉がよく聞かれますが、皆さんこの言葉についてどのようにお考えですか。

川田: ODA の「量から質への転換」については、プロジェクトのチェック機能を活用することが大切だと思います。「顔の見える援助」に関しては、これからの援助政策は NGO との連携を進めるだけでなく、商業主義の批判を避ける意味でも、政府、民間企業、NGO の三者を視野に入れて進めるべきだと思います。また OECF としては、海外投融資制度を積極的に活用することで民間企業の進出を促す。OECF のプロジェクトが終了しても、後を受けた民間企業を中心にその国の経済活性化を促すことができるようにする。また、特に市場経済化を進める必要のある国には、日本から技術者や経済の専門家などを派遣することで、途上国の発展を助けることができると思います。

藤原: 「顔の見える援助」と言われま

すが、ODA あるいは OECF が何を行っているのかが一般国民に知られていない。それがマスコミなどの批判にさらされる要因になっていると思います。ですから ODA、OECF を知ってもらうことが「顔の見える援助」であり、「質の高い援助」につながると思います。一部の人が知らない ODA では質は高まらないし、議論が起きない。結局、人々の知らない高いところから見た援助ということになる。ODA の議論がもっと一般国民のレベルで起きればさらに質が高まる。

石灘: ODA を知っている人、興味のある人に対しては比較的広報を行いやすい面があると思います。しかし、まったく関心がない人にどのように知ってもらうかというのは難しい面があります。

ジョイス: もし日本国民が ODA に反対したらどうしますか？

石灘: 全員が反対ということはないと思いますが、一人一人の状況に置き換えて考えた場合、他人に恩を受けたら恩返しをしたいと思うのではないのでしょうか。なぜこの話をしたかということ、日本も昔援助を受けていたからなのです。お互いの助け合いが援助の原点ではないのでしょうか。

松田: また日本が世界の中で生きていくためには、経済破綻している国があると困るわけです。これらの国を援助し、世界市場の構成員として支えることで共に発展することが必要です。ですから国内的な視点だけで捉えるのではなく、世界のなかで位置づければ ODA は本当に必要だと言えます。

ODA をよりよく知ってもらうには

石灘: 皆さんが援助に関わる機関の職員だとしたら、あまり知られていない ODA、OECF について知ってもらうためにはどのような方法をとられますか。

松田: 僕は OECF と JICA を合併させます。これだと ODA の実施機関はここ一本だから印象は強くなる。



座談会参加の各氏。左から松岡、藤原、川田、ジョイス、後藤、石灘の各氏。

川田: JICA が知名度が高くてどうして OECF が低いのか、その理由の一つとして円借款の経済的メリットが理解されにくいという点があると思います。

石灘: (長い目で見た) 円借款の長期的な経済効果を理解してもらうにはどのような方法があると思いますか。

川田: 円借款というと高校生ぐらいだと難しいだろうし、大学生でもわからない人が多い現状を考えると、大学で講演会を開いたり、OECF を訪問する企画やインターン制度を行うというのはどうでしょうか。そうすれば興味も湧くだろうし、理解も深まる。

後藤: インターンというのはとてもいい制度だと思います。そういう機会があれば誰もが ODA に対する理解を深めることができるのではないのでしょうか。

川田: インターンを経験し、さらに海外のプロジェクト現場を見学して日本に帰る。そうすれば ODA に対する理解も深まるだろうし周りの友人にも広まる。このように少しずつ積み重ねていけば、OECF や ODA についての理解が深まっていくと思います。

藤原: インターン制度も良いですが、税金を払っているのは僕たちの親や働いている人たちです。その納税者に一番影響力を持つのがマスコミで、マスコミは基本的に批判精神に立ってものを見ていますので、常に批判的な記事が

流れることになる。一方、プロジェクトの現場や実施機関の様子が納税者に伝わっていない。ですから OECF はマスコミに対して良いプロジェクトがたくさんあるということを積極的に示し、報道されるまで努力する必要があると思います。また中学生でも税金がどれくらい使われていて、これで橋ができましたと示せばわかります。ですからパンフレットなどを作って学生にも知らせて行くことが大切です。

川田: ボランティア貯金などは、自分たちが預けているお金の利子が援助に使われるということで、ODA を身近な問題として実感できると思います。

後藤: 横浜にある WFP (国連食糧援助計画) の活動に参加したことがあるのですが、横浜という地域なしでは活動は不可能というほど地域と密接に結びついていました。ですから WFP はそこでは知名度は高かったですね。広報活動としては、パネルディスカッションをしたり、チラシを配ったり、グッズを作って販売したりしています。JICA は青年海外協力隊の名前でずっと知名度がある。逆に言えば協力隊がなければ技術協力も皆知らないかもしれない。OECF の場合、一般の人との接点が少ないからなかなか知名度が上がらないということではないのでしょうか。

石灘: 皆さん、今日は貴重なご意見をどうもありがとうございました。(97年11月20日 OECF 本部にて)